

府中かんきょう市民の会

NPO法人 府中かんきょう市民の会々報
2006年 冬号 1月11日発行/季刊
発行人：大崎 清見
連絡先：府中市住吉町 2-30-31.
3-508 TEL 042-368-2183



年頭のご挨拶と展望

NPO法人府中かんきょう市民の会
理事長 大崎 清見

新春おめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願いいたします。

年の区切りに何時も思うことですが、複雑多様な社会のせい

でしょうか。あるいは加齢などから来ることでしょうか。とにかく一年が瞬く間に過ぎ去ることを痛感します。

このような状況のもと、私たち「NPO法人府中かんきょう市民の会」では、会員一人ひとりが貴重な経験と創意工夫により、今、果たすべき役割に着実に取り組んでいることは、誠に有意義であり、有り難いことです。

一方、私たちの活動は、多くの方々のご理解とご協力によって成り立ち、その目的達成に向かうことができることでもあり、関係者の方々に厚く御礼申し上げます。

さて、私たちの会は、今年「設立8年目・NPO法人化12年目」を迎えるわけですが、その目的は「市民と環境との調和」をはかるため、多様な環境事情に対応し、「より良い環境のまちづくり」に貢献することです。

今年もこの目的に向かい、まず、行政・大学・事業者と協働し、多くの市民の方々に環境への理解を深めていただけるような活動をする事、そして、先代から贈られました、かけがえの無い「ふるさとの環境」の「保全と創出と適正な活用」をはかり、同時に「あるべき環境のすがた」の提案や提言を積極的に行なうこと、などです。

こうした当会の方向性も足元を見ますと、いろいろな課題があります。例えば、私たちの活動に一人でも多くの市民参加を願うこと、行政との協働を一層深めたいこと、若年会員の入会の促進、専従職員の配置、などです。

このように各種の課題がありましても、「府中の環境」ひいては「地球環境」をも念頭におきつつ、まず、多くの方々が地元を知り・考え・行動に結びつける「地元学」が深まりますよう最善を尽くし、このことを通して、より良き府中全体の快適環境実現の基盤としての「地域環境力」が高まり、この結果として、会の目標が一步一步具体化できますよう、会員一同こぞって適切な活動に邁進することといたしましょう。



④

あとを絶たない不法投棄

写真は誰かが不用な布団類を夜中に捨てた現場です。不用品を闇に紛れて捨てる人、商売の残材を勝手に置き去る業者など不心得者が絶えません。

これを取り締まる行政にも相当問題があるようです。市の説明では、道路を管理する部署がそれぞれ投棄物を回収する仕組みになっており、ごみ回収の主管であるごみ減量推進課は、ごみボックス近くに置かれた物のみ、市道は道路管理課、都道は東京都、公園は公園緑地課が回収するルールようで、この様に回収責任が分かれているのも監視が行き届かず長く放置される原因になっているのではないのでしょうか。



写真は西府プール南側の現場

市民ボランティア環境調査

雑木林の樹木に親しむ

武蔵台公園

30年前の資料を見ると府中市の北部、なかでも新町・栄町・武蔵台には雑木林が点在していました。今では、まとまった雑木林は浅間山公園と武蔵台公園とその周辺にしか残っていません。その規模は浅間山公園が7.5ha、武蔵台公園が4.7haで、府中市の貴重な緑地となっています。しかしムサシノキスゲで象徴される浅間山がよく知られているのに対し、武蔵台公園は市民の中でもその存在すら知らない人がいるようです。

浅間山公園は以前よりボランティア団体の浅間山自然保護会が活動し、行政と連携をとりながら雑木林や下草の保全に努めています。一方、武蔵台の方はほとんど放任状態で、植え込みには笹が生い茂り、いたるところに踏み跡ができています。薄暗い林床にはムサシノキスゲはもとよりキンラン・ギンランなど草花もほとんど見られません。



ボランティア環境調査

浅間山に比べて荒れているといっても、コナラ・クヌギ・ミズキ・エゴノキなど雑木林を構成する樹木そのものは、むしろ浅間山より大きい感じで、その雰囲気を楽しみ散策をする人は驚くほど大勢います。もう少し市民がここの緑に関心を持ち、手を差し伸べてくれれば、野草も芽生えてきて浅間山に劣らぬすばらしい緑地となることでしょう。

この度、府中市の委託事業の一つとして、市民を対象に観察会を企画した一つの理由は、武蔵台で緑の保全に参加する市民ボランティアが誕生するきっかけになればと考えたからでした。

樹名ラベルの取り付け

11月13日の観察会は絶好の日和となりました。武蔵台文化センターに集まった参加者は当会の会員を含め24人。今回は単に樹木観察だけでなく、参加者に樹名ラベルを作成してもらい、それを樹木に取り付けるまで一連の作業をやってもらうことにしました。午前中は園内を歩き、樹木の観察と解説をおこないました。

植物に親しみ、生き物とのかかわりや自然の仕組みを知るには、ある程度植物の名前を覚える必要があります。自然観察の第一歩といわれる所以です。

クヌギとコナラ、イヌシデとアカシデ、ムクノキとエノキ、ヒノキとサワラなど、よく似た植物の見分け方なども実物を手にとって解説しました。

約30枚のラベルの取り付けは、あらかじめスタッフのみなさんと下準備をしてきたのでスムーズに進みました。ラベルはまだ数が少ない気がしますが、公園を散策する人の楽しみの一つになるのではと思っています。

最後に参加者との意見交換をしましたが、植物は好きだが、名前がなかなか覚えられないという意見が多かったように思います。私自身も植物の名前がでてこなくて困ることが多くなっていますが、同じ植物に何回も出会うことで少しはカバーできるような気がします。無理に覚えようとするよりは楽しむことが大切でしょう。これからも武蔵台だけでなく様々な場所で自然観察会やボランティア活動がおこなわれると思います。興味や関心がある方はいつでもご参加ください。(野口道夫)



下堰緑地 ゴミに負けるなヒガンバナ



自力で広がることのできないヒガンバナ(左)。その球根群(中)。用水跡土手には不法投棄のゴミ(右)

彼岸の頃の四谷

田んぼの畦を真紅に染めたヒガンバナ、黄金に色づく稲。田んぼを仕切るがごとくに咲き誇っている。会員の田中氏と四谷地区を10月中旬ごろ散策。花咲く見事な田園風景を眺めながら、下堰緑地にたどり着いた。

自転車を止め、緑地内を散策。点在するヒガンバナ、更に、緑道(木製チップで敷き詰められた道)へ、緑道にはみ出し群生(鱗茎…球根が込み合い20~30個の塊)化しているヒガンバナ。緑地内の樹林に見え隠れするヒガンバナ、「窮屈だろな」「踏まれなければ良いが」と話しつつ奥に進む。こんなに人の目を惹きつける花。もう少し離して、分球を近くに移植できないものか、と思いつつ先に進む。

西府用水引入口の近くまで続く緑道。そこには、なんとゴミ。誰かが捨てたと思われるタイヤ、電気製品、なべ…などの家庭用品、雑誌・紙くず。“う〜ん” いままで見てきたのはなんなのだ。その隣には、長い茎の先に赤い花をつけたヒガンバナ。助けを求めるかのように一抹の寂しさが漂う光景に出会う。

ヒガンバナ保護の提案

早速、管理元の市の担当課に報告。市でも「環境にやさしいまち」を目指しているし、私たち市民にも何かができるのでないか? “ゴミ捨て場となっている場所に、ヒガンバナを移植しよう。”いやゴミを取り除いて、その後に移さ

ないとかわいそうだと「ヒガンバナ保護について提案」を昨年10月に持ちかけた。さらに12月には緑地内の調査結果(ヒガンバナの群生、約430群・樹木総数約240本)を報告した。

市では、下堰緑地は、①市内でも珍しく自然が残っている緑地で一般公園と異なった管理をしたい。②草花は他所から移植するのではなく、緑地内の自然を生かした公園緑地としたい、まだまだこの地に育っている植物があるのでないか。③そっとしておくのも自然を残すことになる、当面(2~3シーズン)は様子を見てはどうでしょうか? との見解だ。

無造作に捨てられ放置されたゴミについて話し合った結果、ごみ収集は本会及び賛同市民、撤収は市という分担でゴミ除去に合意。まずは、①ゴミが放置・散乱されている場所のゴミを収集・撤収。②その地域に、前述の分球、発掘球根を移植する。③活動がわかる立札を作り見守っていく…こととなった。

また、ゴミや開発から自然を守る活動も地域の方々と一緒に進めることが重要であることから、この活動に是非とも地域の方の参加をお願いしたい。

今後の作業計画、①ゴミの収集撤収(2月末まで)②群生球根の分球・緑道内球根の発掘と植え込み(3月)を予定しています。(田上 昌宣)

ヒガンバナのこと

ヒガンバナ、曼珠沙華(マンジュシャゲ)…、この花ほど多くの異名を持つ花は少ないと言われる。学名は、リコリス・ラディアタ(ヒガンバナ科ヒガンバナ属)。ヒガンバナは3倍体のため花は咲くが不稔で、鱗茎(球根)を分球移植(人手移植)しなければ生育場所を変える事が出来ない。悲しい花と言われ



る所以かもしれない。

また、花と葉が同時期にないため見定めがつかないが、分球を重ねることで開花後浮上根として目につく。中国から持ち込まれ帰化植物となった。球根は澱粉を含むが有毒、田んぼの畦に植えられ、水田の漏水防止に効果があるとされ畦道等に多く見られる。用水路、川原で目につくのは群生球根が洪水で流されたものという。



四谷4丁目の自然樹林の整備で思う

計画立案から市民対話に配慮を

四谷・日新町地域は田園風景の残る景観として貴重な環境基盤であり、昨年1月のシンポジウムにおいて、この地区を「ふるさと景観の保全と創出」と題した市民提案として公表しました。

その後、市長に陳情書を提出し、市の関係者との懇談の場で意見交換を行ってきました。特に、用水路、社寺林、屋敷林とともに用水路沿いの畦畔林とそれに連なる国有地となっている樹林地を市有地として確保し、一帯の緑地保全、景観地域形成を要望してきた経緯があります。

この樹林地の整備工事が始まったとの情報をキャッチし、急遽、11月14日に現地での市の公園緑地課から説明を受けました。大綱は2.5m幅の園路をつくり、木材チップを敷く。出入口は3カ所、キツネノカミソリの植生地を囲い保護する。樹木は伐採しない。園路6カ所に夜間照明を設置するというものです。

「四谷4丁目自然樹林地用地」は面積1,361.86㎡でそのうち市有地として907.93㎡を購入、残り453.93㎡は国有地のまま無償借用とのことです。

当該地は相続問題から物納された樹林地で、関東財務局の立看板がありました。国有財産の入札売却を目にすることが多く、売却されマンションでも建つのではと心配しましたが、市が財政事情の厳しい折、樹林地として購入されたことは緑のまちづくりの観点から高く評価できるところです。北面は用水路と市道に接し、また西側市道からも散策しながらキツネノカミソリやヒガンバナを楽しむことができます。西隣の畑地では樹林の落葉を利用した畑作を営む農ある長閑な風景が見られます。

樹林整備の課題と問題提起

そこで、今回の樹林整備を通していくつかの課題や問題点を提起したいと思います。

(1)府中市長が「まちづくり」への熱きおもい（広報府中）で府中ブランドの象徴は「水と緑」であり…市民との連携と協働こそ…と語っています。

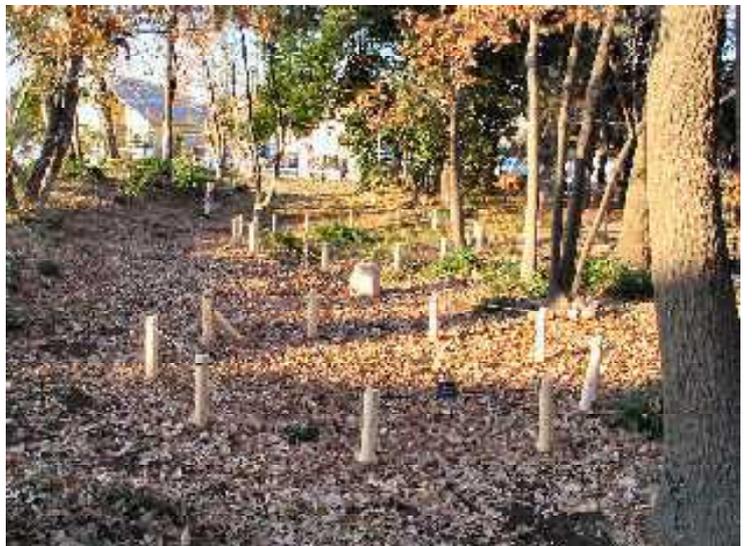
市長方針は事業の計画立案段階でこそ活かされるべきで、積極的な情報公開、市民参加・参画や対話の推進が不可欠です。残念ながら今回は地元や関係者との事前対話はありませんでした。市長方針と大きな落差を感じます。

(2)四谷に樹林があること自体が府中の地域財産であり、生態系保全の観点から散策路は不要か敷設するにしても環境省の推奨する自然探勝歩道0.75m幅が妥当と考えます。奥行が15mほどしかなく、市道からでも樹林や植生観察できる距離です。2.5m巾の歩道は過剰整備ではないでしょうか。また貴重な樹林地ですから整備前に樹木や植生調査することが望まれましたが、事後でも調査を実施し、管理に活かすべきと考えます。

(3)現在推進中の健康センター周辺の「水と緑のネットワーク拠点整備計画」には市民が提案し、自主運営するエコロジーパークやプレイパークの公園整備が予定されています。市民の自発的・主体的な緑のまちづくりには、何よりも行政情報の公開が前提で、その上で市民対話を実践することです。そのための仕組みやルールづくりが緊急の課題ではないでしょうか。

(4)各地で公共空間としての緑地や公園づくりにはワークショップ手法を取り入れる事例が話題になっています。これも市民参画の一つです。試行しながらでも一步一步実践を積み上げる努力なしに市民との連携、協働の実現は不可能ではないでしょうか。

一昨年、下堰緑地(四谷5丁目)の緑道整備で樹木伐採による貴重な風景資源を失ったこと、また昨年、西府(仮称)新駅の区画整理事業における桜並木の伐採事件(西府町1丁目)など、市民の立場で意見を述べてきましたが、今後も微力ながら水と緑には関心を持ち、身近な府中ブランドを守り育てたいと思っています。(進藤礼治郎)



工事中の四谷4丁目の自然樹林地。
杭の囲いはキツネノカミソリ自生地の保護のため

府中水辺の楽校フレイイベント

多摩川で 魚とあそぼう

絶好の水遊び日和です。空は青く広がり、長袖では少し暑いほど。平成17年10月23日、府中水辺の楽校フレイイベント「多摩川で魚とあそぼう」が催されました。府中市郷土の森の南側、多摩川大丸用水堰の上の広々とした緩やかな流れが、子ども達と大人達の今日の遊び場です。

30名弱のスタッフが、子ども達やお父さん、お母さん達を河川敷のテントで迎えます。参加者数総数35名でそのうち子どもは17名でした。

開会式に続いて農工大の学生さんから、川に入る時の注意事項、魚のとり方・扱い方などの説明があり、参加者全員がライフジャケットを着け、さあ、川に向け出発です。

いよいよ川に入ります。元気よく入りすぎて注意されている子、足もとを気にしながらおずおずと入る子。おもしろいことに、どの子も皆ひとたび川の中に入ると嬉々としてきます。人類の祖先の話を持ち出すまでもなくもともと人と水とは相性がいいのです。



こんな大きな鯉がいたよ！

事故のないように、川の上流側から下流側まで、胴長を着けたスタッフが水の中に立ち、川岸からもスタッフが見守ります。最も頼もしいのは、完全武装の救助隊の二人です。

参加者は、まず左岸の草が茂ったボサに挑戦しています。手網と左足をとても上手に使う魚とりのベテランもいれば、ただ手網を振り回しているだけの子もいます。さえぎるものがないとき、子ども達の歓声はどこまでも響くことに気づきます。センダングサの実やススキの穂はそよよともしません。

カワウの500羽ほどの大きな群れが川下に帰っていきます。山の向こうに富士山が頭を見せています。

ほどよい頃「これから川を横断して右岸の方へ移動しましょう」とスタッフ。

この移動で参加者は川の流れや深さ、川底の様子などを自分で判断しながら歩くことを自然に体感します。今度は右岸で魚とりです。まだまだ夢中の子どももお父さんもいますが、そろそろ飽きてきて水の中で遊んでいる子もいます。

多摩川漁協による投網実演が始まりました。魚がいそうな場所をめがけて網を投げ広げ、引き寄せます。懐かしい光景です。

そろそろ川からあがる時間です。本日の成果はギンブナ、ドジョウ、シマドジョウ、アユ、ジュズカケハゼ、カマツカ、ウグイ、モツゴ、オイカワ、コイ、ほかにスジエビ、ヤゴ(ギンヤンマ)、アメリカザリガニなどでした。とった魚を持ち帰った子もいます。皆さん大満足でした。

子どもから熟年者まで、人と川とを結ぶこの水辺の楽校が、ぜひとも末永く、まさに川の流れるように続くことを期待します。(内藤林三)

バス見学会

**生命の星
地球博物館**

今日、地球温暖化をはじめとする地球環境問題は国際的な緊急課題となっている。府中かんきょう市民の会は9月22日、今年度の研修・学習の一環として「神奈川県立生命の星・地球博物館」を見学した。当博物館は46億年にわたる地球の歴史とそこに生きる生物の多様性を、グローバルな視点から展示・展開している。

当日は秋雨前線の影響で、午前は曇り、午後は一時雨となったが、会員と一般市民35名が参加した。午前9時出発、昼食をはさんで博物館での学習・見学、午後小田原市立フラワーガーデンを見学した。

生命の星・地球博物館:主任学芸員による講演は、地球の歴史から始まって、人工衛星による写真映像の解析による現在の地球環境に関する説明まで、予定の30分の約束が1時間におよんだ。各種の鉱物・岩石、マンモスを含む動植物の化石等々、たいへん貴重な展示品を見学できた。

フラワーガーデン:熱帯植物館では珍しい植物が観察できた。植物園では、雨に祟られて、広大な土地の一部しか見られなかったが、バラや梅などの樹木、川辺の植物など見ごたえがあった。

帰途立ち寄ったかまぼこ店やインターチェンジなどでは、小田原の土産品は海の幸が多く、ここでも地球の恩恵を感じる一日であった。

参加者からは、日頃、環境問題と取り組んでいるものにとって、こうした大きな視野から地球を見つめ直すことができよかったとの声もあった。(平澤一彦)

土地区画整理事業という環境破壊

西府新駅工事進展に思う

西府新駅の周辺、特に、南武線の南北の土地は1年3カ月前とは見違えるほどすっかり変貌してしまいました。南武線の乗客として同乗していた知人が「何故今頃このような大規模の環境破壊をすることになったのか？」と彼の友人から問いかけられ返答に窮したそうです。

地元にとっては、西部支所、西府文化センター、第五小学校などへのアクセスとなる二つの踏切が廃止されることは大きな問題ですが、湧水の保全を含む「水と緑」の環境保全も無視できません。毎日散策している多くの人々の行動も、踏切の利便性と環境の享受の両面から大きく制約を受けます。新駅の利便性とは比較にならないほどの犠牲だと思います。

せめて今残っているごくわずかの場所や樹木・草木が保護出来ないものか、ここでは環境保全に絞ってまとめてみます。

西府苗圃全域【1】、及び西府文化センターの北側半分【2】は、御嶽塚の一部も含めて樹木が伐採されました。また、西府文化センター西側のJAの土地のサクラ並木【3】は10本とも伐採されてしまいました。更に、「緑の銀行」【4】と、南武線の北方にあったユリノキの林【5】も伐採されてしまいました。

この地域の特徴は、つぎのようなものでした。
(A)地域住民ならびに西府湧水を訪れる人々の憩いの緑地であり、特に夏は緑陰が作り出す涼風人々を癒します。

(B)NECの森から崖線の数mを数十mの奥行きをつける(南北に厚みをつける)森であり、小鳥・猛禽その他の生物の生息地であり、この鳥たちのさえずりが散策する人々の心を和ませるものです。

以前に考えていた環境保全の 具体的課題と結果

「これらの施策は、やる気さえあればできること。」と約1年半前に考えていましたが、結果はさんざんなものでした。

1. 第五小学校の西側の木々を残すとともに、今の道を森を厚くするために活かす。

第五小学校の西側と北側は教育委員会と同校の努力で、移植するなど原型は変わるものの主な樹木は半数以上残ります。しかし、苗圃の東側の樹木は全て伐採されて薄っぺらいものになりました。

2. 西府文化センターの西側ならびに西南側のサクラ並木を保存する。およびJAのケナフ畑周辺のニホンタン

ポポの群落、その他専門家の調査を待って貴重な植物を保存または移植する。

これも西府文化センターの西南側のサクラ並木を残すことを除いて実現出来ませんでした。

3. 苗圃の南、崖線に沿って島状に残っているアカマツ、ヒノキ、エノキ、ニセアカシアなどの並木を残す。

これは実現しませんでした、並木は未だ残っています。

4. 主要な樹木は、前述のように、苗圃の1本のケヤキと1本のアカマツだけが残されているのみで、他の何十本かの樹木はことごとく伐採されました。特に元「緑の銀行」と南武線の北側の樹木は100mと離れていない場所に公園を作るのに…であります。





伐採前



伐採後



伐採前



伐採後

(写真上) 新緑の第五小学校の西側・苗圃の東側
 (写真下) 苗圃の南端のアカマツ、ケヤキなど

残された環境保全の具体的課題

つまり、第五小学校と教育委員会を除いて「やる気」はなかったと考えざるをえません。市長はじめ市の職員や市議員は口を開けば「水と緑のまちづくり」を繰り返しています。「水と緑のまちづくり」には時間が必要です。文化財を保護すると同様に草木なども一種の文化財として保護してゆきたいものです。このような視点からせめて以下の事柄を実現したいと願っています。

① 苗圃の南側、崖線に沿って島状に残っているアカマツ、ヒノキ、エノキ、ニセアカシアの並木を残す。ヒノキの枝が剪定されているのを見て希望を持っています。

② 西府文化センターの南西に残っているサクラ並木を残す。これらのサクラは、この辺りに残された象徴的な樹木の一つです。

③ 崖線の樹木を残す。今のままだと、代替地として付近に所有することになる住民が、日陰になるとか、根っこが邪魔になるという理由で伐採される、または、崖線の形を変えるような大剪定が行われる可能性が残っています。その前触れかどうかはわかりませんが、いつの間にか「府中市段丘崖線保全地域」の表示板が「市川緑道」に置き換わっていました。

④ 日新町一丁目北交差点そばの崖線を構成する大岩と、岩の上から落ちる滴も含めて残す。これらの大岩は、高さ約2m、幅約10mと同じく幅6mの岩で、平地には極めて珍しく、普段でもうっすらと水がしみ出ており、雨が降れば滝になり水が滴り落ちます。寒い冬は「つらら」も下がります。

環境保全の仕組みについて考えること

土地区画整理の諸々の問題は専門家や利害関係者が参加していたので、それなりに解決できたのですが、環境保全という視点では、専門家として、市民の…つまり広い意味の利害関係者として誰が代表して意見を言ったのでしょうか？

土地区画整理事業の開始前に、こういう私も「貴方は地権者ではないから意見を出せません」と縦覧窓口でいわれ、市長宛メールで意見を言っただけで諦めていました。

恥ずかしいことですが、私が府中市という最大の地権者の一員、一市民であったということを忘れていたのです。この大事業に対して、全て市長をはじめとする行政と、市議会議員という政治に委ねてしまっていたのです。

せめて、これだけの大事業には、市民の意見を広く聴取してから行政や政治が判断するという手順をとる運動をすればと後悔しています。

そして、あらゆる事業には「環境」の視点で考え、発言出来る機会を多く作り、広く市民の意見を聞き入れる様に今後も主張し続けたいと思います。(田中 正仁)



ネパールを訪れて

足立 和巳

ネパール訪問のキッカケ

私の後輩で、たびたび日展に入選していた神戸の男が、何度か銀座の資生堂ホールで個展を開いていましたが、私はその度、彼に会うべく訪れました。彼にとって最後の個展となったのが、彼がネパールへ行った時の作品の個展でした。そのとき彼は「足立さん、ぜひ一緒にネパールに行こうよ」と言ってくれ、私は彼とネパールへ行く約束をしたのでした。しかし彼は、その約束を果たす前に、若くして天国へ旅立ってしまいました。

ヒマラヤの国ネパール

その後、機会もなかったのですが、ある時、もう8年間もネパールへ行っているという方と知りあい、その方が一緒に行きたい方があればと呼びかけられたのですが、結果的に二人で行くことになり、昨年10月中旬はじめから約3週間、ネパールを訪れました。

ネパール訪問に際して、その方から「事前に送るので30Kg以内の洗濯をした極力良い衣料を、我が家に持参されたい」とのことで、私は衣類を持ち込みました。

ネパール国は、世界一高いエベレスト(8848m)や、マナスル(8156m)、ダウラギリ(8172m)のある国です。あちらでは、高さ4000m以下は丘であり、それ以上を山と呼ぶそうです。

それからいうと、富士山は丘と言うことになるのでしょうか？ そのような所は多くの方が寒いだろうと考えがちですが、緯度で言うと台湾と同じくらいで、インドのすぐ北ですから、意外と暖かく、至る所にバナナの木があって実がなっています。



アソナブルナを望む

最初に泊めて頂いた首都カトマンズのShibaさんは、過去5年も在日された方で、日本語も大変上手でしたので、何も困ることはありませんでした。

カトマンズの家々は殆んどが赤煉瓦造りで、泊めて頂いた家も同じでした。その家のお手伝いさんとして働いている14~15歳と思われる女の子の郷里は、バスの終点から徒歩で3日もかかるそうで、1年か2年に1度しか帰れないそうです。

ポカラへの道

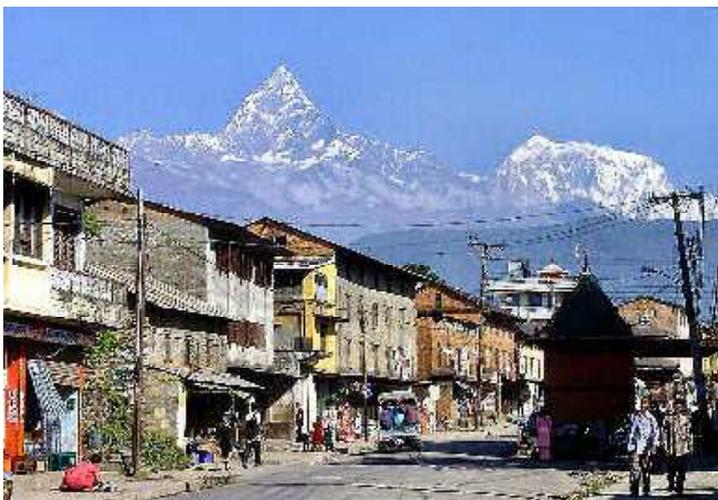
カトマンズや第二の都市ポカラでも乗り物はバスなどの自動車か自転車であり、電車や汽車はなく、空気も澄んで自然そのものです。

作物は稲が至る所で作られています、カトマンズからポカラへ行く途中の山肌...ネパールでは丘肌と言うべきか?...の斜面にまで作られているのには驚きました。小さなものは幅1.5~2mで、長さ5m程の田圃さへあり、山の頂上と思われるところまで耕されているのです。

山村の学校へ行きましたが、長い吊橋を渡り、往来の人がようやくかわせるような道を進むと、小さな学校があって、教室が4つほどあったように記憶します。

またもう1校は、折角訪ねたのですが休みで副校長さんにしか会えませんでした。更に、休みでしたが、もう1つの学校では、便所を借りるつもりで行ったところ、ただ前が横に長く一段落としてあるだけで、仕切りも便器も無く、男の子らは横に並んでしか出来ないのだと思いました。

ポカラでは、日本人が経営している FEWA PRINCE HOTEL に泊まり、毎日、部屋から150度位の角度でエベレストの山々を眺める事ができましたし、毎朝の散歩で、一面の稲田の畦道を歩くことも出来ました。



ポカラの町。背後に聳えるマチャブチャレ